

## 二〇二二年 安居開設にあたって

# 安居の願いと聴講の心構え

安居は、本派が行う学事を中心道場であって、広く真宗教学と仏教教理について論述及び攻究を行い、もって教学の振興と自信教人信の誠を尽くす教師を育成することをその本旨とする。

〔安居条例〕第二条

当派における安居は、享保元（一七一六）年、東本願寺「学寮」の初代講師である光遠院恵空が『大無量寿経』を講じたことがそのはじまりとされています。言うまでもなく、安居は本来、雨期の三ヶ月間に釈尊の教説を反復聞思する機会であり、その伝統を継承する夏安居が、当派においては、江戸時代に「学寮」という形をとって制度化されました。

その意味で安居は、宗門学事の最高峰である「学寮」における研究・講義を象徴する研鑽の場として、現在にいたるまで伝統されてきました。現在、会場となっている大谷大学は、「学寮」の使命を継承・展開してきた学場であり、安居の歴史を体現する場と言えます。

安居は、現代の最先端の成果をもって行われる高度な学術探究の場であると同時に、教学そのものの第一義が、宗門教化に内容を与え、方向を示すものであることを考えるとき、それは単に学問的研究にとどまらず、そこに信心の実践がともなうことが期待されます。

教学に要請されるこのような在り方を、安田理深師は「僧伽の学」と教示されています。安居に参加するということは、決して単なる集中講義の受講ではなく、宗門という僧伽の歴史に主体的に参画する態度をもって研鑽することであり、条例に示される「教学の振興と自信教人信の誠を尽くす教師の育成」とは、その具体的な表現なのです。聴講する教師は、このことを自覚し、責任を持って臨んでください。



## 二〇二二年 安居開設について

### 一 期間

2022年7月17日（日）～31日（日）

※ただし24日（日）は休講日

開講式 7月17日（日）

満講式 7月31日（日）

### 二 場所

① 開講式・満講式——真宗本廟

② 講義・攻究——大谷大学

### 三 本講

講本——『正念佛偈』

講者——講師 本多弘之

### 四 次講

講本——『親鸞聖人伝絵』

講者——擬講 東館紹見

※新型コロナウイルス感染症対策として、本年は定員を70名として実施いたします。  
詳細は本誌67頁に掲載。

真宗大谷派宗務所 教育部

TEL:075-371-9193（直通）

# 『正信念佛偈』講讃

## 本講 本多弘之



本多弘之（ほんだひろゆき）  
講師。一九三八（昭和十三年）中国黒龍江省生まれ。一九六一（昭和三十六）年、東京大学農学部林産学科卒業。一九六六（昭和四十二年）大谷大学大学院修了、同大学助手就任。一九八三（昭和五十八）年、同助教教授辞任。一九八六（昭和六十一年）年、真宗大谷派本龍寺住職。二〇〇一（平成十三年）年、親鸞仏教センター所長就任。著書に『現代と親鸞—現代都市の中で宗教的真理を生きる—』『親鸞聖人のお念仏』（東本願寺出版）、『親鸞の救済観』（文栄堂書店）、『静かなる宗教的情熱—師の信を憶念して』（草光舎）、『新講教行信証』『浄土I・II・III』（樹心社）、『親鸞』と『悪』われら極悪深重の衆生』（春秋社）など他多数。

坂東本『教行信証』に書かれた「正信念佛偈」という名前を、講題に出させていただいた。

その偈を始めるに当たり、ご自身が書いておられる文（先に述べた名前「正信念佛偈」の直前に、「しかれば大聖の真言に帰し、大祖の解釈に闕して、仏恩の深遠なるを信知して」と書いておられるので、この偈文を後の学者が解釈する場合、前半は専ら「大聖の真言」としての三経、特に真実経たる『大無量寿経』に依り、後半は「大祖の解釈」すなわち七祖に依る部分であると、科文で区分けしている。

今年（二〇二二年、令和四年）の夏安居本講は、宗祖親鸞聖人の『正信念佛偈』を考究させていただくことにした。いうまでもなくこの偈文は、宗祖の主著『教行信証』の「行巻」末に置かれている。そこにご自身で、「仏恩の深遠なるを信知して、『正信念佛偈』を作りて曰わく」（『真宗聖典』二〇三頁）と書いておられるので、偈の正式な名前は『正信念佛偈』であることが確認される。しかし世間に流布しているのは、「正信偈」である。この偈文の略称のようにみえる名前は、宗祖以外の誰かが略して付けたものではない。

宗祖が晩年にお作りになった『尊号真像銘文』という仮名の聖教がある。この著（これには宗祖八十三歳と記された略本と、八十六歳と記されている広本があって、いずれも直筆である）は多分、当時、それぞれ別々に分かれて軸装されて使われていたか、いくつかがまとめられて表装されているような「尊号」とか「真像」に書き込まれた銘文類を、宗祖が集められて解説を加えられたと考えられているものである。

その末尾に、聖人が自らの偈文をあげて解説を加えておられる。その文を始めるに当たって、「和朝愚禿

釈の親鸞が『正信偈』の文（広本、『真宗聖典』五三〇頁）と記入しておられる。ここに「正信偈」と言う名前が宗祖自身の筆跡で記されていて、この名前を宗祖自身が許していたことが分かる。その「正信偈」の文から抜き出された十行二十句が、讚として書き込まれている軸装のものがあり、それに註釈を加えられたものと考えられる。

今回は、本来の「正信念佛偈」が置かれている『教行信証』とこの偈との関係や、特に「行巻」末に置かれている意味などを考察させていた

だきたいということから、自筆本の

今回は、本来の「正信念佛偈」が置かれている『教行信証』とこの偈との関係や、特に「行巻」末に置かれている意味などを考察させていた

部分については、確かに「大祖」すなわち七人の祖師方に依って讃揚しているものに相違ない。しかしそうは言っても、短い偈文にまとめられる思想信念の内容は、やはり「親鸞の思想」といふべきところがある

とするのが順当だと思う。『教行信証』において『大經』を真実の經とし、その体が「本願の名号」であると表現してあるのも、その淵源が親鸞以前にあると聖人自身は言われるに相違ないけれども、判

然とそのことを言表されたのは、聖人自身なのではないか。そして、本願力の「往還二回向」による衆生救済という信念も、いうまでもなく宗祖親鸞の独自の了解である。今回は「正信偈」に依りながら、このよう

## 『親鸞聖人伝絵』考察

### 次講 東館紹見



東館紹見（ひがしだてしょうけん）  
擬講。一九六三（昭和三十八）年、岩手県生まれ。一九八六（昭和六十一）年、大谷大学文学部史学科卒業。一九九四（平成六）年、大谷大学大学院文学研究科博士後期課程満期退学。大谷大学文学部講師、准教授を経て、現在、大谷大学文学部歴史学科教授。博士（文学）。専門は日本古代・中世仏教史。仙台教区盛岡組善林寺住職。共著に『蓮如・人と教え―蓮如上人御一代記聞書』に学ぶ―（東本願寺出版）、『日本の名僧 5 浄土の聖者 空也』（吉川弘文館）。

このたび二〇二二年の安居次講を拜命し、聴衆の皆様方と共に『親鸞聖人伝絵』を拜読する機会をいただくこととなった。

『親鸞聖人伝絵』は、宗祖親鸞聖人の曾孫覚如上人（一二七〇―一三五二）が撰述した、宗祖の生涯とその意義を記した伝記絵である。

覚如上人は、二十一歳から翌々年まで二年近くをかけて関東の宗祖の遺跡を巡拝して門弟等と出遇い、改め多くのの人々と共に歩んだ宗祖の生涯について教示を受けた。そしてこの知見と領解をもとに、二十五歳、宗祖三十三回忌の年、宗祖の生涯をたどりつつその徳を讃仰する『報恩講私記』を著し、その翌年には重要な出来事を盛り込んで『親鸞聖人伝絵』を述作した。更にその後も、現在、真宗本廟に所蔵される康永本と称される伝絵においてうかがわれるような完成された形に至るまで、ほぼ生涯を尽くして伝絵の改訂を行い、宗祖の事績の領解と公開に

な宗祖親鸞のご苦勞を訪ねて見たいと思うのである。

講 本 『正信念佛偈』  
テキスト 『真宗聖典』（東本願寺版）

『顯浄土眞實教行證文類』翻刻篇  
『真宗聖教全書』一・三経七祖部（天八木興文堂）

努めたのである。

宗祖親鸞聖人が、法然上人との値遇を通してたしかめ開顯した、阿弥陀如来による他力回向の大信心の上に開かれる浄土眞宗は、人間の我執に基づく仏法利用の一点の介在をもゆるさない眞実の教えを、我執に満ちた現実の社会の真つただ中で人々と共に歩みつつ聞き開いていく、希有な生き方を開示する仏道である。

覚如上人の生きた時代は、宗祖がかかる仏道の要を受けた法然上人が亡くなって暫くの年次が経過する中で、専修念仏の教えの受け止め方をめぐり浄土諸流間での見解の相違が顕在化し、同時にそれらの門流ごとくに法然上人を顕彰する伝記の制作や拠点の地の確定が活発化した時期であった。また、宗祖の在世中から存在していた、関東の門弟間での教えの受け止め方をめぐる異なる見解の存在も問題となっていた。更に、そ

